

路上、お邪魔ですか？

Rojō [shared ground]

— am i in your way?

2026年9月19日(土)～11月23日(月・祝)



1: 銭湯山車巡行部《銭湯山車》2019
©Jun Tainaka

か つて日本には、公界(くがい)と呼ばれる一定の制度や権力の及ばない自由な空間が存在していました。寺社の門前や宿場町に見られた領域は移動する人々や芸能を受け入れ、文化や交流を育む装置でもありました。

現代における「路上」は、そうした歴史的空間と完全に重なる訳ではありませんが、所有や統治の枠組みが曖昧で、ときに制度へのレジスタンスによって、路上に自由を見出そうとしてきました。一方で路上は、単に自由や解放の象徴というだけではありません。排除の論理によって居心地の悪さや不安定さも抱えています。本展では、路上をキーワードに紹介可能な作品や歴史的なできごと、さらには言説をふくめ、現代においてますます複雑になる公共性をもつ課題を考えます。

本展の開催は、1986年に発足した「路上観察学会」の創設40周年も契機としています。赤瀬川原平や藤森照信らによって結成された路上観察学会は、意図をもって生み出された芸術作品ではなく、都市と自然とが意図せず生み出した状況を、可笑しきをもって取り上げる「目」を、メディアを通して共有した活動です。そこには路上がもつ豊かさを伝えるとともに、開発によって均質化した都市への批判も込められていました。

「彼女が邪魔だった」— これは、2020年に渋谷で起きた路上生活者殺害事件で、加害者が発した言葉です。路上は、所有が曖昧であるがゆえに公序が強調され、時に他者の主観的ルールが衝突する息苦しさを孕んだ空間でもあります。2020年の事件は、公共性の意味を取り違えたときに起こりうる取り返しのつかない暴力を私たちに突きつけました。

それでも、この「自由」と「邪魔」が共存する路上においてこそ、批評的な文化実践が数多く立ち上がってきたのです。本展は、現代美術から歴史的資料、公園の遊具や銭湯、大道芸までもを紹介しながら、路上は誰のものか？をキーワードに、過去の実践から現代の都市に対する批評的なアプローチまでをたどりながら路上の公共性を探ります。批評とユーモアの喧騒に溢れた、路上の芸術に出会いにきてください。

👉 展覧会情報

開館時間 午前10時～午後6時(毎週金曜日は午後8時まで)
※入館は閉館時間の30分前まで

入館料 一般1000円(800円) 大学生800円(640円)
高校生・60歳以上500円(400円)
小中学生100円(80円)

※()内は団体10名以上及び渋谷区民の入館料
※土・日曜日及び祝・休日は小中学生無料
※毎週金曜日は渋谷区民無料
※障がい者及び付き添いの方1名は無料
※リピーター割引あり。観覧日翌日以降の本展会期中、
有料の入館券の半券と引き換えに、通常料金から2割引で
入館可能。1枚の入館券につき、1回まで有効。

休館日 月曜日(9月21日、10月12日、11月23日は開館)、
9月24日(木)、10月13日(火)、11月4日(水)

主催 渋谷区立松濤美術館
学術協力 路上観察学会
協賛 株式会社たねや、京都新聞印刷、内外薬品株式会社
助成 公益財団法人ポーラ美術振興財団、
科学研究費助成事業(JSPS科研費)
後援 現代風俗研究会、日本生活学会、高松市、
日本建築学会

展覧会の会期・開館時間・イベント等が変更・中止となる場合がございます。
最新情報は当館HPまたはSNS等でご確認いただきますようお願いいたします。

👉 出展作家

路上観察学会(赤瀬川原平、藤森照信、林丈二、南伸坊、松田哲夫、杉浦日向子、一木努、荒俣 宏、飯村昭彦)、鈴木康広、ギリヤーク尼ヶ崎、Chim↑Pom from Smappa!Group、山田脩二、迫川尚子、児玉房子、ダニエル・エヴェレット、銭湯山車巡行部、GROUP...

👉 報道関係のお問い合わせ

広報担当(白石) pr-sma@shoto-museum.jp
TEL:03-3465-9421 FAX:03-3460-6366

* 画像をご希望の場合は、作品名の前にある番号をお知らせください。
* 画像のご利用後、データは破棄してください。
* 画像の使用は、本展のご紹介をいただける場合のみとしてください。
* 基本情報確認のため、一度校正をお送りください。

路上を語る7つのセクション

本展では、「路上」という言葉に「共有された土地（Shared ground）」という意味を込めています。そこは、ルールや慣習、他者の視線によってつねに振る舞いが調整される場所でありながら、人びとは路上で遊び、表現し、ときに逸脱しながら、路上の姿を絶えず変化させてきました。本展は、そうした路上をめぐる実践のこれまでとこれからを、つぎの7つのセクションに分けて紹介します。



2: 鈴木康広《遊具の透視法》
2001 撮影: 川内倫子

②道路以後

道路とは、ただ移動するためだけにあるのでしょうか。おそらくはじめはそうだったでしょう。道路の起源を辿ると、約二千年前の中国とイタリアに遡ります。秦時代の長安と古代ローマで、道路は軍隊を迅速に移動させるインフラとして整備されました。時代は下り、日本でも古代律令制のもと七道駅路が整えられ、地方の情報が人とともに移動し、中央に届けられました。近代になると、明治政府は鉄道の敷設に力を注いだため、道路の整備は遅れ、道路法が整備されたのは大正8年のことでした。さらに3年後、全国で統一された道路標識を定める「道路警戒標及道路方向標二関スル件」が制定されます。その法令に基づく標識の形をとどめるものが、香川県高松市塩江町で発見されています。かつての国道脇に、ひっそりと残っていたその標識に記された文字は「屈曲多シ」。現代の日本の道路は、戦後の高度経済成長期の自動車の普及とともに、急速に整備されました。一方で車は歩く人々を押し退け、1970年代には死亡事故の被害者の多くを子供が占めるなど、道路を歩くことすら困難な状況を生みました。漫画家のpanpanyaがわずかに6コマの中で提示するのは、当たり前のように都市が移り変わることが、実はとても不思議なことであるという逆説的な状況です。しかしこの事実は、いつか移動を止めて、周囲に目を凝らすことによってしか気づくことはできません。いつも歩いていた場所が、建物が取り壊されて過去の風景を思い出せなくなることは多々あることでしょう。こうした事実気づくとき、道路はわれわれに立ち止まることを要請します。本セクションでは、改めてわたしたちと道路との多様な付き合い方について考えます。

出展作家: 高松市 / panpanya

①遊びとハック

私たちが都市で共に生きるには、一定の秩序が求められます。しかし、その秩序はときに客観性を欠き、完璧なルールが存在するわけでもありません。鈴木康広の《遊具の透視法》(2001)は、かつて多くの公園に当たり前にあった球体の回転遊具(グローブジャングル)を用いた作品です。昼間に遊ぶ子供の姿が、夜になると遊具の表面に残影として映し出されることで、昼と夜、地球の自転と遊具の回転が重なります。しかし発表から20年以上が経過した現在、本作品は作家の意図とはすこし異なった相貌を見せ始めました。1日の時間変化による子供の不在ではなく、撤去によるグローブジャングル自体の不在が問題になったのです。この作品は、回転する遊具そのものがスクリーンとなりますが、それを回す他の鑑賞者の存在によって、初めて像が立ち上がります。グローブジャングルもまた、登る者と下で回す者によって成り立つ遊具です。誰かに自分の身体を委ねることで遊びが成立するこの遊具は、まさにこの仕組みゆえに、危険物として次々に公園から失われてゆきました。ここに、公園における小さな秩序と自由のせめぎあいが見えてきます。同じような秩序のつくり方は、大人の世界でも見られます。95歳の現役大道芸人、ギリヤークニヶ崎は、都市の雑踏のなかで人々がつくる「円」に見守られながら踊ってきました。渋谷や新宿、京都、そして札幌の路上で、半世紀にわたり公演を続けてきました。彼が最初にチョークで路上に描く円は、踊るための舞台であると同時に、芸能者と観客が、共に調和した空間を作り上げるための合図でもあります。本セクションでは、遊具を回すこと、踊ることを通じて、小さな逸脱とそれを生み出す構造に目をむけます。遊びやハックは、ルールに従うこととは異なるかたちで、もうひとつの秩序を立ち上げていく実践です。

出展作家: 鈴木康広 / ギリヤークニヶ崎



3: ギリヤークニヶ崎 札幌公演(2018年8月) 撮影: 植村佳弘



4: 路上観察学会 発会式 1986 ©飯村昭彦

③路上の発見

1986年6月10日、神田の東京学士会館に集まったのは、赤瀬川原平や藤森照信をはじめ、路上に思わず目を奪われてしまった面々でした。この日、路上観察学会が発足します。ん?と思う街なかの不思議なもの。それらを「物件」と呼び、写真を撮って共有していきました。それらは、赤瀬川の言葉を借りれば「超芸術」です。作者が明確に存在せず、役に立たず、非実用であるにもかかわらず、芸術を超えた芸術として立ち現れるもの。路上観察とは、こうした超芸術を写真に収め、品評会という形式で共有する実践でした。誰かが撮った写真に、別の誰かが言葉を添える。そのやりとりのなかで、誰も気づかなかった意味や価値が、あらたに見いだされていきます。こうした「見立て」の積み重ねは、道路という言葉が持つ、一見そつげなく無機質なイメージを、認識のレベルから組み替えていきました。本セクションでは、超芸術トマソンや建築探偵団など、路上観察学会の活動を手がかりに、その40年を振り返ります。そこに見えてくるのは、路上そのものを変化させるのではなく、目玉の革命によって新大陸を発見してきた過程です。

出展作家:路上観察学会



5: ダニエル・エヴェレット
《Untitled (from Marker)》2024
© Daniel Everett

6: 迫川尚子

お面をかぶっておどける新城さん。沖縄出身。右翼の街宣車だろうか。君が代が流れると頭をかかえてうずくまった。
1996年8月 ©迫川尚子

④道か、広場か

いま、新宿駅西口にあったかつての「広場」が姿を消しつつあります。1966年、建築家・坂倉準三は《新宿西口広場》を設計しました。地下に大きく口を開く駐車場への渦巻くスロープは、地上と地下を視覚的につなぎ、立体的な広場を生み出していました。車と人、電車とが交錯するジャンクションとして、世界的にも稀な空間でした。しかしこの広場は、竣工後まもなく「広場」としての資格を剥奪されます。1969年、ベトナム戦争への反対を訴える若者たちが集い、議論を交わす場となったこの場所で、警察との衝突が起きました。行政はここを「公道」として位置づけ、排除へと転じます。看板は「広場」から「通路」へと掛け替えられ、立ち止まることすら管理される空間へと変質しました。公共の場は、こうして容易に奪われてしまうのです。1990年代、不況のなかで失業者が集まり、地下にはダンボールハウスの村が生まれます。1995年には、アーティストたちが居住者の許可を得て、ダンボールハウスに絵を描く活動を始めました。同時に、後に「排除アート」と呼ばれる突起物も設置されていきます。こうした状態は数年続きましたが、1998年の不審火による火災によって、ダンボール村は消失しました。いま、新宿西口の地下は再開発によって、こうした記憶そのものが失われようとしています。本セクションでは、「道か、広場か」という問いをめぐる歴史と実践を、アーティストと写真家の記録からたどります。

出展作家:Chim→Pom from Smappa!Group
／山田脩二／迫川尚子／児玉房子



⑤ルール

信号、標識、白線、防犯カメラなど、私たちは多くのルールに囲まれながら、生活しています。自由に見える路上は、同時に細かなルールによって編み上げられた空間でもあります。そうした管理の論理を、道路はその出自から包含しています。道路は、国家が統治を容易にするインフラとして整備されました。つまり逆説的に、道路は人に奉仕しているように見えて、実際には人の移動や経済活動を通じて国家の秩序を再生産する装置でもあります。私たちの都市の根底には、この「道のヒエラルキー」が組み込まれており、知らず知らずのうちに人間そのものよりも優先されているという点で、すでに管理の論理が内在化しています。建築家のクリストファー・アレグザンダーが『都市はツリーではない』と批判したのは、こうした秩序の固定化を批判し、むしろ重層的で重なり合うネットワークとして都市をとらえようとした試みでもありました。路上を構成する重要な「道路」には、こうした自由と管理の二重性——すなわち、開かれているようで閉ざされているという構造——が潜在的にあるのです。路上の思想はその矛盾の上にしか成立しえません。写真家ダニエル・エヴェレットは、こうした路上のルールを、写真を通して可視化します。監視カメラや道路標識に満ちた、現在の日本を撮影することで、私たちがどれほど制度的な環境に囲まれて生きているかを浮かび上がらせます。しかしながらこの作品が示すのは、ルールそのものではなく、ルールが生み出す摩擦の気配です。路上とは、秩序と逸脱、可視化と不可視化、管理と占拠がせめぎ合う場所であり、その境界は固定されていません。

出展作家:ダニエル・エヴェレット

⑥路上から都市へ

道を編み上げれば、それはいつしか都市になります。この都市を行き交う個々の人間はしかし、ルールに縛られ、告発し、時にその抜け目をかいくぐってたくましく生き抜くだけの存在なのでしょう。時には彼らが権力を持ち、新しいルールのあり方を主体的に構想することも可能なのではないのでしょうか。建築家たちによるコレクティブ・GROUPは今回、新しい渋谷の都市計画のマスタープランを展示し、こうした問いに答えます。都市でしばしば発生する痛ましい犯罪へのリサーチをきっかけにして、都市の労働者、政治家、路上生活者、はたまた部屋の片隅で眠る人まで、あらゆる人の生活の尊厳を取りこぼさぬよう、完璧に計算しつくされた都市像を描こうとします。しかし、そこに現れた都市は、思いもよらない姿をもって立ち現れます。個人主義も、民主主義も、それだけでは時に暴走することがある。路上はこの単純かつ困難な事実を、最も身近な場所から、生々しく伝えてくれる装置でもあります。

出展作家: GROUP



7: GROUP
《眠らない都市》
部分模型
2026
ディレクション
涌井智仁

⑦終章、再び路上へ

時間、空間、政治、時代、そして個人と全体。共有された土地（Shared ground）としての路上は、それらが折り重なりながら、つねに書き換えられ続けてきた場所でもあります。その変化を刷新と呼ぶこともでき、失われたものへの郷愁として受け取ることもできるでしょう。しかし重要なのは、路上という切り口を通して世界を見ることで、私たちが当然のものとして受け入れてきた主観が、ゆるやかに揺さぶられるという点にあります。路上の像は、もともと輪郭の定まらないものであり、その境界や闘は、さまざまな実践や実験によって繰り返して引き直されてきたといえます。また、その閾値を決めているのは、法や規則だけでもありません。むしろ、人間の振る舞い、環境の変化、偶然の出来事といった無数の条件によって、路上の境界は状況ごとに生成されて、また更新されています。本セクションでは、そうした「いまの路上の境界」を探るために、一つの実践を提示します。それは、《銭湯山車》。東京を中心に、各地で銭湯が次々と取り壊されていくなかで、保存に向けた運動が行われてきました。しかし現実には、多くの銭湯は建物として残されることなく、解体されてきました。この作品は、そうして失われた銭湯の「部材」を引き取るところから始まっています。建物そのものを保存することは叶わなかったものの、カランやロッカー、看板、大黒柱といったかろうじて救い出すことのできた欠片。それらを集め、組み替え、「動ける銭湯」として作り直したのがこの銭湯山車です。不動産としての銭湯は失われましたが、動産としての銭湯は、別のかたちで生き延びました。山車として街を巡行することで、かつて銭湯が担っていた「人が集まる場所」という機能は、あらためて路上へと持ち出されたのです。

出展作家: 銭湯山車巡行部

👉 イベント情報

① 記念講演会「路上にあるものと路傍にあるもの」

登壇者: 木下直之氏(静岡県立美術館館長、東京大学名誉教授)

日時: 10月17日(土) 午後2時～(約1時間30分) 地下2階ホール

* 無料(要入館料) * 定員70名(要事前申込)

募集期間(必着): 7月4日(土)～9月6日(日)

② ブラ渋谷特別編「渋谷川で路上観察！」

講師: 田原光泰氏(白根記念渋谷区郷土博物館・文学館学芸員)

日時: 10月10日(土) 午前10時30分～午後4時(昼食休憩あり)

レクチャー: 地下2階ホール

まち歩きコース: 渋谷駅～参道橋跡～原宿橋跡～東郷神社(現地解散)

* 無料(要入館料) * 昼食は各自ご用意ください。* 定員20名(要事前申込)

募集期間(必着): 8月1日(土)～9月6日(日)

③ 銭湯山車巡行 開催予定！

出演: 銭湯山車巡行部

日時: 11月23日(月・祝)

現在調整中。詳細は決まり次第当館ホームページでお知らせします。

* 最終日には展示室内での山車の公開はありません。

④ クローゼットトーク「路上、いかがでしたか？」

登壇者: 本橋 仁(本展メイン企画者、金沢21世紀美術館学芸員)

木原天彦(本展企画者、渋谷区立松濤美術館学芸員)

日時: 11月22日(日) 午後2時～(約1時間30分) 地下2階ホール

* 無料(要入館料) * 定員70名(要事前申込)

募集期間(必着): 9月1日(火)～10月30日(金)

⑤ 担当学芸員によるギャラリートーク

日時: 9月27日(日)、10月16日(金)、11月1日(日) 各日午後2時～(約40分)

* 無料(要入館料) * 事前申込不要

⑥ 館内建築ツアー

白井晟一設計の美術館建築を職員がご案内します。

9月25日(金)、10月2日(金)、9日(金)、16日(金)、23日(金)、30日(金)、11月6日(金)、13日(金)、20日(金) 各日午後6時～(約40分)

* 各回定員約20名 * 無料(要入館料) * 事前申込不要

* ①②④のイベント申込方法: 往復はがきまたは当館ホームページ上の申込フォーム。

1通につき1名のみ。応募者多数の場合は抽選。

👉 館内インスタレーション・ビューは、
9月末からご提供予定です。詳細は広報担当までお問い合わせください。

👉 次回展覧会のご案内

「舟越直木 見えないものに形をあたる

—舟越家から生まれたもうひとりの異才—

2026年12月5日(土)～2027年2月7日(日)